

# 受け継がれる先人の知恵

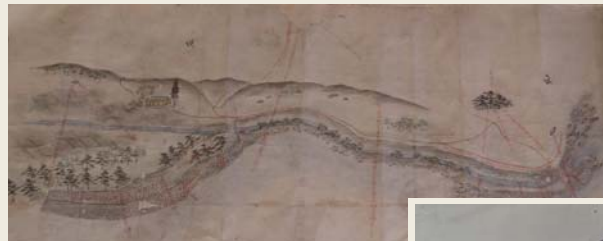
伊那谷の歴史の中で、幾たびも繰り返されてきた大洪水や土石流災害。そのたびに人びとは、苦難を乗り越え、生活を建て直し、水を治めるための努力と工夫を続けてきました。

## 受け継がれる土木遺産

### 惣兵衛堤防

(高森町)

高森町出砂原は、大島川と天竜川との合流点(右岸下流)に位置し、未の満水の時には、大島川からの大規模な土石流によって天竜川が堰き止められ、一時は天竜川が泥の海になったと伝えられている所である。中村惣兵衛は、未の満水時に大島川から運ばれた巨石を使用して、1752(宝暦2)年に堤防を完成させた。惣兵衛が主任技師となって造った堤防は、いずれも堅牢で優秀であったため、惣兵衛は1750(寛延3)年の着工時、75歳という高齢であったが、工事に起用されることとなった。築堤以後、出水ごとに補強工事が施され、下市田村を守ってきたが、1961(昭和36)年の三六災害により破堤した。



下市田村水除堤絵図(下市田河原 耕作者組合所蔵)



1993(平成5)年、親水護岸工事により河床から掘り出された惣兵衛堤防の巨石



1934(昭和9)年3月撮影のありし日の惣兵衛堤防(高森町歴史民俗資料館所蔵)

### 伴野堤防

(豊丘村)

天竜川を挟んで惣兵衛堤防の対岸にある伴野村は、惣兵衛堤防からの水はねによる激流によって、たびたび大災害を被っており、1809(文化6)年に最初の堤防を築いた。その後も堤防は幾度も流出していた。1883(明治16)年に開かれた河原土地所有者の集会の折、松尾千振は村人に堤防修復の必要性を説き、有志33名とともに「開墾組」を作り堤防工事を始めた。松尾千振は工事途中1892(明治25)年に39歳の若さで亡くなってしまったが、「開墾組」が意志を引き継いだ伴野堤防は、補強・修理が行われ、1904(明治37)年に完成した。その後も洪水のたびに修繕されたが、1961(昭和36)年の三六災害により破堤した。



開墾組彰功之碑(左)と松尾千振頌徳碑(右)



現在の伴野地区の堤防

### 座光寺石川除

(飯田市)

伴野堤防の対岸にある座光寺は、伴野堤防により跳ね返された激流により、たびたび被害を受けており、座光寺石川除を造る契機となった。伴野堤防完成より22年後の1831(天保2)年に完成。1961(昭和36)年の三六災害によって、惣兵衛堤防と伴野堤防は多くが失われたが、座光寺石川除の保存状態は極めてよい形で残っている。



市道の端に現在も残る石川除

### 理兵衛堤防

(中川村)

未の満水により荒廃した田島村(現中川村)一帯を救済するため、松村理兵衛忠欣、常邑、忠良の親子三代が、37年間かけて天竜川に築いた、長さ180mの堤防。1808(文化5)年に完成後も、天竜川および前沢川の大水のたびに決壊し、そのつど補強や増築を繰り返してきた。2010(平成22)年、護岸工事の際の調査で、前沢川の堆積物の上に造られた石堤が発見された。理兵衛堤防の初期のものと考えられ、一部はそのままで埋め戻し、一部は移築復元されている。



普請願出絵図(年代不明)



復元された理兵衛堤防

## 発展する治水事業

### 川路・龍江・竜丘地区治水対策事業

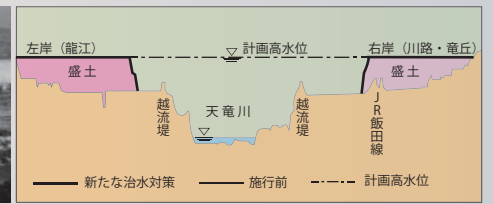
(飯田市)

飯田市川路・龍江・竜丘地区の沖積地は、上流の鷲流峡と下流の天竜峡の狭窄部の間に位置する「氾らん原」であるため、幾度となく水害にあってきた。～川路地区の水害記録～

1715(正徳5)年	未満水	1868(明治元)年	辰満水
1789(寛政元)年	酉満水	1961(昭和36)年	三六災
1804(文化元)年	子満水	1984(昭和58)年	五八災
1828(文政11)年	子満水		



三六災害数日後の川路 手前が天竜峡



2002(平成14)年に完成した全面盛土方式による治水対策



○ 三六災時の氾らん域 ○ 治水対策事業範囲

1966(昭和41)年に「天竜川上流川路・龍江・竜丘地区治水対策に関する基本協定書」が締結され、家屋移転、越流堤の築造、低地の地上げ、姑射橋の架け替え等が行われた。2002(平成14)年には全面盛土方式による治水対策が完成した。

「天竜川防災拠点事業」として建設された「天竜川総合学習館(かわらんべ)」では、「川に親しみ川を知り、洪水や水難から身を守る知識や、自然環境に目を向けてもらいたい」との願いを込め、防災体験や自然体験の学習を行っている。



天竜川上流域には、過去の災害にまつわる歴史資料、石碑などが数多く残っています。私たちの住んでいる街を知り、川、山を知り、災害はどこにでも起きるということを認識し、自分を守り、家族や地域の人たちを守るために必要なことは何かを考えましょう。今後も起こるであろう災害に備え、先人の英知と努力を共有し、次世代につなげていきましょう。

# 次世代へ